

精神科急性期病棟において患者によい変化 がみられたときの看護者の認識の特徴

ー自ら発語・体動がみられない患者との 関わりを通してー

福浦善友（応用看護学）

【キーワード】 急性期・看護過程・認識・感情像・
よい変化

本研究は、精神科急性期病棟において、入院後自ら発語や体動がみられない患者の回復過程に、よい変化がみられたときの看護者の認識の特徴を取り出すことを目的とする。

研究対象は一事例に対する自己の看護過程である。研究方法は、看護として意味があると思われる17の場面を研究素材とした。分析方法は、各看護場面から看護の特徴を取りだし、患者の回復過程において各期に区分をする。各期から看護者の関わりの意味を取りだした。そこから、各期での患者への刺激となった支援と、患者に変化がみられたときの看護者の認識の特徴が明らかになった。

第1期の、亜昏迷状態の患者に対して快の刺激を与え続け、衰えた認識と実体を賦活させた支援では、常に外界の反映を考え、すべての行為が刺激となるため快を意識し、実体の動きや変化を念頭におく。衰えた認識でも医療行為が描けるような認識のあり方。

第2期の、人との関わりに対する恐怖によって、日常生活行動が狭まった患者の認識に目を向け、他者からの刺激を最小にする心配りをしながら、認識と行動の幅を上げた支援では、まず生活一般を描き次の行動を予測する。症状発発時よりも反応が良いときこそ関わる好機と認識し、病棟での生活と社会での生活力を想像し比較する。感情表出が楽になるよう認識への注目を高め、行動に移せない思いを理解し、視線などを最小に留め選択肢を拡げることで快の感情を得ようという認識のあり方。

第3期の、関わり方が分からず交流を閉ざした患者に対して、他者との良い交流を積み重ねながら、

対人関係の認識の幅を上げた支援では、実際に交流のモデルを示し、よい体験を重ねられるよう配慮し、負の体験の想起があっても、交流の快の感情像の膨らみを認識する。他者の病状を患者と一緒に確認し、快か不快かを認識するあり方。

第4期の、社会的自立を意識し、集団での交流において媒介を用いながら、快の感情像を強化させ、生活行動の幅を上げた支援では、一対一から集団へと意識し、看護者から活動に関心に向け、家族や専門職者の協力も得て、楽しめる場を意識する。快の感情は共有し、一気に強化を図る意識をもつ。家族へは患者の快を伴う変化を直接示すことを意識する認識のあり方。

以上の分析より、看護者は、快の感情像の拡がりや念頭におき、行動に目を奪われることなく常に患者の認識に関心を注ぐとともに、感情表出が楽になる関わりを意識する。また交流において不安に満ちている患者へは、一方的にチャレンジを試みるのではなく、看護者が一緒になって交流のモデルを示し、それに応じて患者が行動を起こせたときには、そのときに生じたであろう快の感情像の強化を図ることが重要である、との結論を得た。

患者への援助が困難になっている 学生への指導

ー精神看護学実習における学生指導からー

光永憲香（応用看護学）

【キーワード】 精神看護学実習・指導過程・援助
困難・認識・対象特性

本研究は、精神看護学実習において、自分自身の指導場面から、学生がどのような状況で患者への援助が困難になり、患者により関心を注ぎ、援助できるためには、どのような指導が重要であることを明らかにする事を目的としている。

研究対象は、精神看護学実習で研究者自身が学生